

令和4年度

第39回 公益財団法人 日本中学校体育連盟研究大会



報告書

福岡大会

令和5年

1/19(木)・20(金)

オリエンタルホテル福岡 博多ステーション

主催 / (公財) 日本中学校体育連盟・九州中学校体育連盟・福岡県教育委員会・福岡市教育委員会
主管 / 福岡県中学校体育連盟
後援 / スポーツ庁・全日本中学校長会・福岡県中学校長会・福岡市立中学校校長会
(公財) 日本教育公務員弘済会福岡支部



公益財団法人 日本中学校体育連盟

公益財団法人 日本中学校体育連盟シンボルマーク・中体連旗について

(公財)日本中学校体育連盟は、全国中学校体育連盟 33 年の歴史の上に立って、平成元年 2 月に発足した。それまでの輝かしい歴史を継承し、未来に向かって力強く飛躍することを願い、新たに日本中体連のシンボルマーク、並びに中体連旗を設定した。

制定年月日は、平成元年8月31日

*日本中体連は、中学生の心身の育成、体力の増強及び体育・スポーツ活動の振興を目的として活動するものである。

*日本中体連は、国際理解教育の一環として中学校の体育・スポーツ活動を通して、国際交流を推進するものである。

この基本理念を基に「明るく希望にもえ躍動する姿」をイメージし、全国都道府県中体連と9つのブロック中体連の連帯を表し、Nippon Junior High School Physical Culture Associationの頭文字を中心に図案化した。

- ・中心の円の赤は、情熱・希望を表し、円を縁どる九輪を青（コバルトブルー）とし、未来への限りなき躍進、Nの文字には白色を配し、若人のもつ純真さを表した。
- ・中体連旗の黄色は、快活・陽気・幸福等の象徴であり、また全国中体連の歴史を引継ぐ色である。

(公財)日本中学校体育連盟憲章

- 一、体育・スポーツ活動を通して、人間尊重の精神にみち、心豊かな人間の育成に努める。
- 一、体育・スポーツ文化の継承とその進展に寄与し、生涯スポーツ活動の推進に努める。
- 一、体育・スポーツの国際交流を通して、中学生の国際理解の推進と国際スポーツの振興に努める。

第39回（公財）日本中学校体育連盟研究大会 福岡大会を終えて



第39回（公財）日本中学校体育連盟研究大会
福岡大会実行委員会 会長
福岡県中学校体育連盟 会長

野口 修司

令和4年度第39回（公財）日本中学校体育連盟研究大会福岡大会が、令和5年1月19日、20日の2日間にわたり、福岡市の「オリエンタルホテル福岡博多ステーション」で開催されました。第39回福岡大会は、3年ぶりに集合・対面で開催し、全国各地から約250名の皆様を迎え、「豊かなスポーツライフの実現に向けて～持続可能な運動部活動の在り方と中体連の役割～」の研究主題のもと、ご参会の皆様のご支援とご協力により、多くの成果を収め、無事大会を終了することができました。

心より御礼申し上げます。

本大会では、2日間の日程の中で、第1日目に講演会とシンポジウムを、第2日目には分科会を行いました。講演会では、阿久根謙司氏より「木の上に乗って見ましょ～アスリートの自立を引き出すコーチング～」と題して、指導者が身に着けるべき子どものやる気を引き出すためのコーチングマインドの大切さをご教示いただきました。

シンポジウムでは、テレビ西日本アナウンサーの山口喜久一郎氏をコーディネーターに福岡県縁の指導者として、小林亮寛氏、鶴我隆博氏、岩城規彦氏、運動部活動学に精通した関西大学人間健康学部教授の神谷拓氏の4名のシンポジストの皆様から、「学校教育とこれからの運動部活動～中体連に期待するもの～」をテーマにお話を伺いました。学生時代から今に至るまでに得られたご経験やスポーツや運動部活動における課題、これから期待することなどをユーモアを交えながらも、貴重な意見交換に、熱く、楽しく、有意義に聴き入ることができました。最後に各シンポジストから我々にいただいたエールには、大変勇気づけられました。

第2日目の分科会では、4つの研究テーマに沿って、それぞれ2名のパネリストからの実践を踏まえた研究発表を通して、研究協議を行いました。各都道府県が抱える様々な課題に対しても意見交換をしたり、考えを深めたりすることができ、とても充実した分科会となりました。

福岡県中学校体育連盟では、本大会の開催に向けて実行委員会を組織し、鋭意準備を進めてまいりましたが、多々不備な点があったかと思えます。この場を借りてお詫び申し上げますとともに、多くの皆様にご参会いただき、大会運営にご協力いただきましたことに、あらためて御礼申し上げます。

結びに、本大会を開催するにあたり、（公財）日本中学校体育連盟をはじめ、九州中学校体育連盟、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会、スポーツ庁、全日本中学校長会、福岡県中学校長会、福岡市立中学校校長会並びに各関係機関の皆様方からのご指導とご支援に対しまして、心より感謝申し上げます、大会終了のあいさつといたします。

目 次

第39回（公財）日本中学校体育連盟研究大会

	福岡大会を終えて	1
目 次		2
基 調 報 告		3
特 別 講 演		4
シ ン ポ ジ ウ ム		6
第 1 分 科 会		10
第 2 分 科 会		14
第 3 分 科 会		18
第 4 分 科 会		22
大会スナップ集		26
大会参加数一覧表		34
編 集 後 記		35

基 調 報 告

第39回(公財)日本中学校体育連盟研究大会
福岡大会実行委員会 会長

野 口 修 司

現在の中学校の運動部活動を取り巻く環境は、教員の多忙化、地域における少子化の加速による部員数の減少、指導者の不足や保護者や地域からのニーズの多様化など多くの課題が山積している状況です。しかし一方では、運動部活動が学校教育の一環として行われ、我が国のスポーツ振興を大きく支えてきたというのも事実です。また、生徒同士や生徒と教員との好ましい人間関係の構築を図ったり、生徒自身が活動を通して自己肯定感を高めたりするなど、生徒の健全育成に大きな役割を果たしてきました。

第1回研究大会が昭和60年に始まり、本研究大会で39回を迎えます。これまでに研究主題が3つ立てられ、本研究大会の主題「豊かなスポーツライフの実現に向けて」が4つ目の主題となり2年目の大会です。中学校の部活動における様々な課題について各都道府県やブロックを中心に研究を進め、本研究大会において発表・協議される内容は、われわれ中体連関係者に多くの気づきや示唆を与えてくれるものとなっています。

本研究大会は、全国各地から運動部活動指導者及び中学校体育連盟の運営に関わる方々が一堂に会する貴重な場となります。当面する諸課題やよりよい運動部活動の方向性について、講演やシンポジウムによる貴重な提言や提案、そして分科会での研究協議を通して、持続可能な運動部活動のあり方や中学校体育連盟の今後の役割を考えていく機会にしたいと考えています。

結びに、本研究大会が大いなる成果を上げ、(公財)日本中学校体育連盟の発展はもとより運動部活動に携わる全国各地の皆様の躍進につながることを祈念いたしまして、基調報告とさせていただきます。

< 講演 >

【 演題 】

木のうえに立って見ましょう

～アスリートの自立を引き出すコーチング～

【 講師 】

阿久根 謙司 (あくね けんじ)

【プロフィール】

1961年、埼玉県所沢市生まれ

- ・自身は幼少期から野球選手
- ・早稲田実業高校時代は甲子園に2度出場
- ・早稲田大学野球部では主将を務め、第13回日米大学野球日本代表、東京六大学野球ベストナインに2度選出される

1984年 東京ガス(株)入社

- ・社会人野球の東京ガスで選手として7年間プレーし、その後東京ガス硬式野球部コーチ、監督を歴任

2011年2月 FC東京社長に就任

- ・J2に降格したFC東京を1年でJ1に復帰させる
- 2015年1月末退任

2019年4月 東京ガスケミカル(株)取締役常務執行役員就任



「アスリートの自立を引き出すコーチング」



前シーズン J2 降格となった FC 東京（サッカー）の社長に就任した際、チームのテーマを「自立」とした。これを実施していくために必要な武器こそが「コーチング」であった。「ティーチング（指示命令）」は、自主性を奪い、失敗する権利を奪う。それに対し、「コーチング」はスキルやメソッドではなく、自発的な行動を起こさせるためのコミュニ

ケーションマインドである。高い自発性からは、創造性・積極性・個性・多様性等が発揮される（『オペラント心理学』より）。主なコーチングスキルとして、1つ目は、オープンクエスチョンを使って考えを巡らせること。2つ目は、相手に会話のペースや歩調を合わせる「ペーシング」を行うこと。3つ目は、「チャンクダウン・チャンクアップ」で関連した質問で話を掘り下げたり、その内容を確認する質問をすることである。4つ

目は、「承認」つまり、認める・ほめること。最後のスキルは「沈黙」で相手の話を決して遮らずに最後まで聴くことである。過程を見て承認することで、子どもは能動的になる上に、積極性や創造性、個性や多様性を発揮する。高い自発性は個人差を認めて立場の違いを尊重する管理態度から生まれ



れる。具体的な管理態度とは、子どもの話に根気強く耳を傾け、気持ちに共感し、否定せず最後まで聴くことで、それが「愛情」である。「親」という字が「木」、「立」、「見」を合わせると成るように、木の上に立ち、子どもの自立を見守ることが指導者のあるべき姿である。

シンポジウム

テーマ

「学校教育とこれからの運動部活動」
～中体連に期待するもの～

コーディネーター

◆ 山口 喜久一郎 テレビ西日本 アナウンサー

シンポジスト

◆ 小林 亮寛 野球塾コビーズ 代表 元プロ野球選手

◆ 鶴我 隆博 (株)ライジングゼファークオカ
取締役育成普及部部長 元中学校教師

◆ 岩城 規彦 中村学園女子高等学校 剣道部監督

◆ 神谷 拓 関西大学 人間健康学部 教授

【テーマ】

「学校教育とこれからの運動部活動

～中体連に期待するもの～

【コーディネーター】

- ◆ 山口 喜久一郎 氏 テレビ西日本アナウンサー

【シンポジスト】

- ◆ 小林 亮寛 氏 野球塾コビーズ 代表
元プロ野球選手
- ◆ 鶴我 隆博 氏 (株)ライジングゼファーフクオカ
取締役育成普及部部長 元中学校教師
- ◆ 岩城 規彦 氏 中村学園女子高等学校 剣道部監督
- ◆ 神谷 拓 氏 関西大学 人間健康学部 教授

上記のテーマのもとに、シンポジスト4名の話
題提供、コーディネーターによる問題提起があり、
主に、以下のキーワードを取り上げ、それぞれの
立場から意見交流が行われた。

○指導者としてどのようなことを大切にしてい るか

(小林) 自分が関わる選手の競技人生が豊かであ
ることである。高校では名門のPL学園に進学し、
その後プロ入りを果たした。そこで初めて補欠の
経験をした。そこで挫折を経験し、その後海外へ出
て、そこで再び試合に出るという経験をした。補欠
及びレギュラーと言う両面を経験し、豊かな競技
人生だったと振り返ることができた。プロでもそ
ういう経験をせずに引退する選手は多い。自分自
身の経験から、できるだけ子どもたちに試合に出
場させるという機会づくりをしようというような
指導をし、福岡の野球界が盛り上がるように思っ
ている。

(鶴我) 競技関係なく、部活動をする目的は、競
技を通して人として磨かれていかなければなら
ない。人づくりというふうに考えている。勝負ご
とであるために、勝ち負けはあるが日本一になっ
たからといって、それが将来に対する何かになる
わけではない。負けから学ぶこともある。その競
技を通して私たちが子どもたちに何を伝えてい

けるか、子どもたちがそれを吸収して、将来いろ
んな場面にぶつかった時に部活動で培ったもの
で乗り越えていけるようにする指導を心がけて
いる。今はBリーグのユースチームであるが、決
してプロの養成所ではない。今も中学校の部活動
と同じような感覚で活動している。地域から応援
されるようなチームになること、それからアスリ
ートパスといわれるようなことも視野に入れ指
導している。

(岩城)「剣道を学ぶ」のではなく、「剣道で学ぶ」
と生徒には伝えている。高校生として学校の1人
の生徒として一流の選手である前に一流の高校
生であれということ伝えていく。目的は人間形
成であり、目標は剣道日本一。目標は達成できな
くても目的は達成していく。社会に出て恥ずかし
くない立派な人間を形成していくということを考
え、日々指導を行っている。

○運動部活動というものをどのように捉えてい るか

(神谷) クラブという語源は、人が集まった組織
のことをクラブと呼ぶようになった。指導の理念
の中に、社交とか人と人とのつながりというもの
がクラブの指導には不可欠なものではないかと思
う。また、生じた課題をみんなで解決していく
ということがクラブという言葉のなかに含まれて
いる。そう考えると、みんなで集まって自分た
ちで課題を解決していくことが、そもそものクラ
ブの形なのだと思う。

○部活動の意義について

(鶴我) 調和のとれた心身の発達と、今の現代の
子どもたちに不足している能力をいかに身に付
けさせるか。チームスポーツであるためにチーム
ワークや競争心。そして、そこから生まれる達成
感などを得ることができる。これは座学等では身
に付けることができない。また、様々な経験をす
ることで忍耐力の形成にもつながる。

(岩城) 部活動面だけでなく、その生徒の生活面にも目を向けて、成長に携われるところ。また、部活動は社会の縮図とも言えると指導している。いろいろなトラブルがあったり、コミュニケーション不足が生じて、いろいろな問題が起こったり、その中で苦しみや問題を共有しながら目標に向かっていく活動ができることが部活動の意義だと思っている。

○地域移行について

(神谷) 地域移行は、お金のかかる問題である。先生方に本来払われるような手当が払えなくなっているところから地域移行は始まっている。コストカットから始まっているので、コストをかける議論にならない。出発点は先生方の労働条件の改善。それはとても大事なことだが、これはお金をかけないと解決しない問題である。その議論が不十分のまま見切り発車してしまったという点が否めない。そして今、お金がかけられない状況で軌道修正をしている。また、地域移行した場合に国がお金を出さないとすると、保護者に負担がかかってくる。今コロナの影響で経済的に苦しんでいる家庭は多くある。そういうことが明らかになって、学校の先生たちは、その状況で何ができるか、部活動についてどう語るのかというところが今議論できるようになってきた。コストの部分を含めて議論していかなければならない。お金の話は敬遠したくなるが、そういう状況ではなく、子どもたちの1番身近で接している中体連の先生方がどこに意義があって、私たちが関わることでどんな意味があるのか、ここまではできるけど、ここから先は地域に。というようなことをきちんと言葉にできるかどうか重要である。過去にもこの地域移行で失敗している。同じことを繰り返さないためにも同じような議論ではなく、リアリティーのある議論をしていく必要がある。学校が担うべき課題、果たすべき役割を明確化する必要がある。まずは、部活動の顧問というのは本来もつ意味は、相談役であり、生徒

が自分たちで課題を解決するための相談に乗るための顧問。見守りや、アドバイスを行い、顧問の役割を果たしてくというような視点を持ち、専門外である先生でも顧問を担えるような環境を整えていくということも一つである。

(鶴我) 部活動が担う大きな役割の1つに生徒指導があったし、部活動で救われている生徒は、今までも多く存在したし、これからもそう考えられる。一方で、部活動を負担に思っており、地域に移行するべきだと言うように思っている先生のこと否定することはできないし、学校教育の中で部活動指導を前向きに考えている先生もいる中で、そのバランスが非常に難しい。そして地域の各状況に人材が確保できるのか、そこは難しい問題であると思う。まずは、業務内容の改善・精選を行い、時間が確保できるようにやっていく。これは学校単位でできることではないかもしれないが、そういうことも重要である。部活動に対して前向きに捉え、意欲をもった先生を大切にできる環境作りも必要。部活動は永遠である。是非部活動の火を消さないように頑張ってもらいたい。

(岩城) 自分自身も部活動に育ててもらった一人であるため、部活動を大事にしてほしい。働き方改革や地域移行など様々な課題があるが、主になるのは、生徒のことを一番考え取り組んでいくことであるし、その考えをもっていれば、課題も乗り越えられると思っている。

(小林) 会社を経営している立場から見えるのは、お金の動き。子どもたちの需要やそのカテゴリーをしっかりと把握し、それに見合うだけの指導というサービスを提供しなければならない。人が動くだけお金がかかることである。しかし、その対価というものに基準や相場が少ないということも難しいところである。部活動は日本の素晴らしい文化であると思う。今後部活動がより良い形に

なっていくように、地域と学校が連携して行ってほしい。

○総括

(山口) 本日は、今後の教育や、部活動に対するシンポジストの方々の経験を踏まえた、大変ためになるお話を聞くことができました。それぞれのお立場で是非お役立ていただき、子どもたちのために頑張っていたいただきたい。



〈シンポジウム〉



〈山口 喜久一郎 氏〉



〈小林 亮寛 氏〉



〈鶴我 隆博 氏〉



〈岩城 規彦 氏〉



〈神谷 拓 氏〉

第 1 分科会

分科会テーマ

「中体連の組織及び競技会の在り方とその運営」

研究発表

- ◆ 藤池 由香 大阪市中学校体育連盟 副理事長
大阪市立旭陽中学校
- 廣山 真由美 大阪市中学校体育連盟 顧問
大阪市教育委員会事務局 指導部
保健体育担当 保健体育グループ

「中体連組織の現状と課題」
~時代に応じた持続可能な中体連~

- ◆ 賀好 行彦 徳島県中学校体育連盟 理事長
徳島市徳島中学校

「地域の実態に応じた中体連主催大会の在り方」
~特色ある運営と今後の展望~

紙上発表

- ◆ 釜付 純次 鹿児島県中学校体育連盟 副理事長
阿久根市立鶴川内中学校

「コロナ禍における新たな取組」

第1分科会

第1分科会 テーマ

「中体連の組織及び競技会の在り方とその運営」

【指導助言者】

(公財) 日本中学校体育連盟 副会長 大塚 洋一
鹿児島県中学校体育連盟 会長 大平 公明

【司会者】

鹿児島県中学校体育連盟 副会長 前田 伸行

【運営責任者】

福岡大会実行委員 副会長 園山 浩

【提案内容】

①「中体連組織の現状と課題」

～時代に応じた持続可能な中体連～

大阪市中学校体育連盟 副理事長
大阪市立旭陽中学校教諭 藤池 由香
大阪市教育委員会事務局指導部
保健体育担当 指導主事 廣山 真由美

○提案趣旨

大阪府は33市町1村から構成されている。大阪中学校体育連盟については、8地区で編成され、各地区中体連事務局及び担当が中心となって大会運営に係る役割を担っている。また、中体連に関わる状況については地域によって異なるため、それぞれの地区の特性を生かしながら、スポーツによる生徒の健全な育成を図ることを目的に取り組んでいる。本研究では、各地区における中体連が直面する現状と課題に着目し、対応策の検討を進めながら、時代や状況に応じた持続可能な大阪中学校体育連盟の在り方を考える機会とする。

②「地域の実態に応じた中体連主催大会の在り方～特色ある運営と今後の展望～」

徳島県中学校体育連盟 理事長
徳島市徳島中学校 賀好 行彦

○提案趣旨

本連盟は、発足より75年を経過しています。この間、様々な変化はあったものの、歴史を感じる伝統ある組織運営を引き継いでいた。しかし、

70年余り以前の当初と現在では、学校・教職員・生徒数において過疎化が歴然と進んでいる。そのため、主催大会の開催においては、運営内容の再検討の必要性や、改善が求められた。この状況において、本県の主催大会の変容について紹介し、さらには、現在の運動部活動地域移行との関連を踏まえ今後の課題を掴みたいと考える。

③ 紙上発表

「コロナ禍における新たな取組」

鹿児島県中学校体育連盟 副理事長
阿久根市立鶴川内中学校 釜付 純次

○提案趣旨

本県中体連は発足以来、74年間、多くの先生方が力を合わせて、県中学校体育の振興を図り、生徒の体力技能の向上及びスポーツの発展に取り組んできた。そして、中学校教育の一環として、スポーツ実践の機会を創出し、スポーツの発展並びに体力技能の向上とアマチュア精神の高揚を図り、心身ともに健康な中学校生徒の育成と生徒相互の親睦を図るために、県中学校総合体育大会を開催している。昨今、運動部活動を取り巻く環境は、部活動生の減少による複数校合同チームの増加や生徒、保護者の多様なニーズに応えるための顧問の指導力向上、熱中症や新型コロナウイルス感染症の感染防止に配慮した運営など大変厳しい状況に変わりつつある。さらに、本県においては、多くの離島があるという特性や生徒数の減少が著しい地域における中体連主催大会の現状と課題、今後どのような大会運営を行っていくべきかを考える機会にしたい。

○質疑・協議内容

【佐賀県 島 一満】

拠点校についての質問。大阪での拠点校の基準を伺いたい。学校が決めるのか、大阪市教育委員会が決めるのかという点もお伺いしたい。

【宮城県 菅原 芳樹】

拠点校方式で少人数ということも想定される。

ある一定の人数集まったから拠点校が成立するのか、先に拠点校を決めて希望する子を集めるのか、優先順位を教えてください。

【大阪 パネリスト】

1点目、拠点校の基準に関しては、少人数の部活動がある場合には、合同部活動という形で成立させており、完全に部がないという条件での拠点校方式は検討中である。

2点目、大阪市の行政が拠点校を決めるのかどうかに関しては検討中である。

3点目の優先順位も、今後模索していく中でよりよい方針をとっていきたいと考える。

【大阪 林 憲治郎】

中体連では、来年度から新たに拠点校方式でも試合の参加を認めることになっている。また、合同部活動での規定の緩和がなされている。大阪市、大阪府としても、今後この形を進めていきたい。

【鹿児島 小松 将大】

拠点校方式の場合、他校の生徒との連絡のやり取りや安全管理、練習時間の確保等詳しいことをお聞きしたい。また拠点校方式が故に、他校の生徒とのやりとり等が増えることで、逆に教員の負担が増えるのではないかと。

【大阪 パネリスト】

合同部活動にしても拠点校方式にしても、完全に教員の負担を減らすことは難しい。

拠点校方式とはいえ、担当の先生に連絡していただいたり、部活動指導員を活用したりしている。

【大阪 酒井 睦美】

大阪府吹田市では、女子サッカー、剣道、柔道等は、市教委がホームページで保護者に拠点校の周知をしている。そこでも、拠点校の教員が予定を立てるが、連絡等は原則本人と保護者が行き、急遽予定が変更になった場合は、管理職を通して連絡をとっている。

【沖縄 新里 直樹】

徳島県中体連の中体連主催大会のあり方について、陸上大会への取り組みが非常に負担であるというアンケート結果も出ている。これについての課題等があれば教えてください。

もう1点はケーブルテレビへの対応について、他の都道府県でこのような対応をしているというのがあればご教示いただきたい。

【徳島県 パネリスト】

郡市陸上大会では、中止を希望する教員も少しずつ増えてきている。しかし、歴史がある大会であること、教育的意義が高いということから続けている。また、県総体には陸上競技が含まれていないため、陸上競技をこの群市陸上に位置づけ、協力を仰いで行っている。

ケーブルテレビの件は、郡市によっての対応が違っていた。一概にこういう対応をしているとは言えない。肖像権の問題もあるが、ケーブルテレビの協力も得て大会を盛り上げたいという考えで行っている。

【徳島県 澤口 博之】

郡市陸上大会は今、8郡市の対抗戦で行っているが、少子化もあって、郡市の対抗というより1つの大会という形で行っている。すべての競技が終わり、陸上でパフォーマンスしたいという子のため、総合体育大会が終わった9月に予定していて、毎年選手たちが素晴らしい活躍を見せてくれる、意義のある大会である。

【指導助言 I 大平 公明】

職員の部活動に対する意識の低下が、部活動の諸問題に最も大きく影響していると考えられる。さらに、国が教職員の業務改善を謳い、部活動と学校を切り離していかこうとする動きの中で、学校体育から社会体育へ移行していくことは、今の中体連の組織形態では難しい。中体連と各競技団体がタイアップしていくためには、各大会の開催日程も検討していかなければならない。学校体育の枠組みから社会体育の枠組みが広がっていくということ

を頭に入れて、中体連の組織をどのように考えていくかが重要である。拠点校指導は業務改善が目的であるが、各学校に連絡や調整を行う教員が必要であり、やはり負担が減っているとは考えにくい。部活動指導員の制度はあるものの、実際にその指導者を見つけることは困難である。学校の「業務改善」は、学校の業務を勤務時間内に終わらせることではない。業務を精選することで、子どもたちと関わる時間を増やしていくのが「業務改善」である。学校体育から社会体育に移行していく中で、子どもたちが活躍できる場をもう一度見つめ直していく必要がある。

【指導助言Ⅱ 大塚 洋一】

持続可能な運動部活動に対する明確な答えはない。思い切った主催大会の見直しや業務削減など、課題にしっかりと向き合い、それに対する解決策を一つ一つ考えていくことが大切である。その一つの手立てとして合同チームの対応・拠点校方式が挙げられる。改革は良いことばかりではなく痛みを伴う。その痛みを子どもが受けるようなことがあってはならない。中体連としては、これまで人間形成の場であり、多様な学びを得ることができる部活動の良さを、持続させていきたい。今一度子どもたちのためにできることは何か、強く考えさせられた二日間であった。



〈第1分科会〉

第2分科会

分科会テーマ

「豊かな心と健やかな体を育む運動部活動」

研究発表

- ◆ 古越 祐司 長野県中学校体育連盟 研究部委員長
軽井沢町立軽井沢中学校

「リフレッシュ期間の設定がもたらす効果について」
~自ら対話的・主体的に取り組む自立した部活動部員の育成を目指して~

- ◆ 岩井 洵 千葉県小中学校体育連盟 事務局次長
千葉市立稲毛中学校

「意欲を喚起させるための剣道指導の工夫」
~競技力向上や健康体力の保持増進を目指して~

紙上発表

- ◆ 佐藤 雄太 宮崎県中学校体育連盟 副理事長
宮崎市立宮崎西中学校

「豊かな心と健やかな体を育む運動部活動」
~競技力向上検討委員会の取組を通して~

第2分科会

第2分科会 テーマ

「豊かな心と健やかな体を育む運動部活動」

【指導助言者】

(公財)日本中学校体育連盟 副会長 石川 一博
宮崎県中学校体育連盟 会長 古川 康二

【司会者】

宮崎県中学校体育連盟 副会長 谷口 行孝

【運営責任者】

福岡大会実行委員 副会長 安部 博智

【提案内容】

- ①「リフレッシュ期間の設定がもたらす効果について～自ら対話的・主体的に取り組む自立した部活動部員の育成を目指して～」

長野県中学校体育連盟 研究部委員長
軽井沢町立軽井沢中学校 古越 祐司

○提案趣旨

長野県中体連が目指す「伸びる繋がる笑顔の運動部活動」を達成するため研究部として「自ら対話的・主体的に取り組む自立した部活動部員」の育成を目指したいと考えた。「健康・安全」に関わって部員（生徒）の身体と心を守り、顧問が主体となって活動するのではなく、「勝利を目指しながらも、生涯スポーツにも繋がり、主体性を持たせた部活動」を目指したいという願いが本研究の根底にある。全県の各地区から集まった研究部員の話から「断続的に故障者が出てしまうことやモチベーションの維持」などが話題となった。その原因を話し合うと通年での活動が多く、オーバートレーニングなどが原因で起きてしまうのではないかと考えた。そこで研究部では、積極的なオフシーズン（以下リフレッシュ期間）を設けることとしその取り組みが、部員の心身疲労の蓄積、モチベーションにどのような影響を与えるのかを検証した。

- ②「意欲を喚起させるための剣道指導の工夫 ～競技力向上や健康体力の保持増進を目指して～」

千葉県小中学校体育連盟 事務局次長
千葉市立稲毛中学校 岩井 洵

○提案趣旨

千葉県では、競技力向上と健康体力の保持増進を目指し、運動部活動の充実と発展に力を入れてきた。一方で、生徒数の減少や放課後の過ごし方の多様化などによる部員数の減少も進んでいる。また、部活動の地域移行の流れに併せて学校内における部活動の衰退や消滅等が危惧されている。そんな中、本研究が生徒たちの豊かな心と健やかな体を育むために、そして運動部活動の維持や適切な活動に効果があると考えた。そこで、千葉市の公立中学校の剣道部の取組を報告し、そこから成果や今後の課題を明確にし、剣道をはじめとする部活動の効果的な指導法の発見につなげたいと考えた。

- ③ 紙上発表

「豊かな心と健やかな体を育む運動部活動

～競技力向上検討委員会の取組を通して～」

宮崎県中学校体育連盟 副理事長
宮崎市立宮崎西中学校 佐藤 雄太

○提案趣旨

宮崎県中学校体育連盟では、県内中学校の運動部活動の諸問題について調査検討し、運動部活動の健全かつ効果的な運営を図ることを目的に「競技力向上検討委員会」が設置されている。ここでは、指導者の資質の向上を図るとともに、本県中学生の競技力向上についても組織的に協議を行い、毎年「調査検討結果のまとめ」を発行している。2027年に本県で開催される「国民スポーツ大会」へ向け、競技力向上が求められる中、中学校の運動部活動に期待される役割は非常に大きい。本県の中学生の競技力向上のために、競技力向上検討委員会の取組も重要となっている。そこで、今回はこれまで協議・調査・実践してきた

ことを紹介していくとともに、豊かな心と健やかな体を育む運動部活動がどうあればよいかについて課題や展望に迫っていきたいと考えた。

○質疑・協議内容

【長野県 秋山 昇】

オフ期間の設置における取り組みについての生徒・保護者・教員のアンケート調査から、部活動を生徒指導や規則正しい生活を送るための道具にしていることが読みとれる。本来それは副産物であるはずである。しかし、アンケート結果から、保護者の思いもそこに依存したものが多い。この長野県での取り組みを少しずつ広めていきたい。

【宮崎県 佐藤 雄太】

宮崎県でもリフレッシュウィークと呼ばれる期間の設定を行っている。適切な休養期間はどのくらいなのか、競技によってそれは異なってくるのか教えていただきたい。

千葉県の取り組みについて、初心者に意欲を持って取り組ませる指導の、その次の段階の指導方法について伺いたい。

【長野県 パネリスト】

屋外スポーツのサッカーであれば、気候の関係から2週間程度が適当であるということで設定を行った。屋内スポーツのバレーボールに関しては大会の開催時期があるため、大会終わりの1週間程度を休みとした。各部活動で切り替わる時期やタイミングを加味し、活動を行えない時期に休みをとることが適切ではないかと研究部の中で話をした。休みの期間や時期の問題に関しては、今後検討を重ねて改善していく必要がある。

【千葉県 パネリスト】

今回紹介したのは、授業や部活動の初歩の段階で入口として行なっている。これをやったからといって技術が向上するものではなく、これが終わったから次のステップへというものではないと考える。

【指導助言Ⅰ 古川 康二】

日本のスポーツの文化にとって、豊かな心と健やかな体を育むというテーマは、部活動が果たすべき最も大きな役割である。長野県のリフレッシュ期間が心身に与える影響を検証した研究は興味深かった。しかも、ただ休ませるだけでなく、管理栄養士や理学療法士からの事前指導は、リフレッシュ期間がパフォーマンス向上のための積極的な休養であるという意識につながった。また、リフレッシュ期間は、精神面だけでなく、身体面にもいい影響をもたらすことが確認され、疲労回復だけでなく、超回復にもつながったと考えられる。休養と運動は密接な関係にあるので、運動種目や活動時間、練習メニューなどによって効果的な休養時間や期間が異なる。今後、運動量や種目に応じたリフレッシュ期間の設定について、更に研究を進めていただきたい。千葉県の実践例は、楽しいだけでなく、楽しみながら技能を着実に身につけることができる効果的な練習方法である。また、紹介された新聞切りや半丸太は、用具を工夫することによって、視覚野、聴覚野などの感覚器官の上達が促され、技能を習得するために大変有効な手立てである。さらに、手剣道や剣道カードバトルは繰り返し行うことで、思考と動きが連動して理にかなった戦術が使えるようになる。生徒にとって一番のモチベーションは大会の出場だと思うが、初心者は一方的な敗北を経験して意欲が下がってしまいがちである。初心者のみが出場できる大会の開催は、同じ初心者同士で切磋琢磨することが意欲づけとなり、大変意義のあることだと感じた。宮崎県の運動部活動研究班が作成した運動部活動ハンドブックは、練習計画の立案方法や入部届、退部届、外部指導者の委嘱状など、様々な様式が具体的に示され、大変役立っている。今後も生徒や指導者の目線から新たな方策を作り出してほしい。教員の働き方改革を踏まえた持続可能な部活動の実現に向けて、地域の受け皿が圧倒的に不足しているにも関わらず、地域移行以外の議論が検討されていないのが不思議である。土日の地域移行を進める計画

は、平日と土日の指導者が異なるため、生徒たちに混乱が生じる。また、経済的に苦しい家庭の子どもから運動の機会を奪ってしまうことも予想される。平日も地域移行を進めていくようだが、平日夕方時間帯に部活動を指導できる人材を見つけることは極めて困難だ。課題の一部を述べたが、考えれば考えるほど課題が多く、現実的ではない。教師の熱意や情熱に委ねてきた部活動を、勤務時間内に行う方法も考えるべきだ。部活動を必修クラブとして週に4回ほど教育課程の中に位置づければ、教員間にある業務の負担の差も解決できる。何より、教師と生徒の信頼関係を構築できる時間が増える。茨城県の守谷市では、夏休みを短縮し、週3回5時間授業にして5時過ぎには完全下校が出来る工夫をしている。このように、それぞれの地域や学校に合った様々な方策が検討されるべきだ。部活動において改善されるべき点は多々あるが、日本の部活動という独自のスポーツ文化は、ジュニアスポーツの最善のあり方である。青山学院大学の西島教授が、2022年11月発行の現代スポーツ評論の中で、「部活動は地域移行するしかない」という「空気」の危うさという時評を載せている。まさに、今の状況を的確に捉えた時評であり、ぜひ読んでいただきたい。運動部活動がこれからも豊かな心と健やかな体を育む場であり続けてほしいと切に願っている。

【指導助言Ⅱ 石川 一博】

学校教育における目的を端的に言うと、知・徳・体である。新学習指導要領には、「生きる力」とは、「知・徳・体のバランスのとれた力」と示されている。特に、豊かな心と健やかな体の育成はいつの時代になっても、社会全体の願いだ。長野県の研究発表について、自治体でこれから地域移行が進んでいくと、多様なあり方がますます学校現場にも求められる。そして、それらを理解するダイバーシティ&インクルージョンがキーワードになると考える。千葉県からは、道具の工夫を紹介していただき、すぐに実践することができる取り組みだった。宮崎県からは、これまでの競技力向上検討委員会

の取り組みをまとめたものを発表していただき、非常に参考になった。集中期間から改革推進期間にトーンダウンしたが、部活動の地域移行が進んでいくことは間違いない。地域と連携をとりながら、豊かな心と健やかな体を育むことは大きな課題である。本連盟の強みは、情報共有を通していろいろな解決策を導き出していくことであると考え



〈第2分科会〉

第3分科会

分科会テーマ

「連携でつくる運動部活動」

研究発表

- ◆ 城口 直紀 三重県中学校体育連盟 研究部長
亀山市立亀山中学校

「運動部活動における学校と地域との連携」
～三重県における部活動の地域移行の現状と課題～

- ◆ 菊地 正道 岩手県中学校体育連盟
岩手地区中学校体育連盟評議員
葛巻町立葛巻中学校

「葛巻町における『地域部活動』の在り方について」

紙上発表

- ◆ 濱崎 憲司 大分県中学校体育連盟 研究部長
大分市立上野ヶ丘中学校

「運動部活動における学校と地域社会との連携」
～津久見市拠点校方式の合同部活動について～

第3分科会

第3分科会 テーマ

「連携でつくる運動部活動」

【指導助言者】

(公財)日本中学校体育連盟 副会長 田中 節
大分県中学校体育連盟 会長 西川 幸宏

【司会者】

大分県中学校体育連盟 理事長 園田 啓助

【運営責任者】

福岡大会実行委員 副会長 大塚 充敏

【提案内容】

①「運動部活動における学校と地域との連携

～三重県における部活動の地域移行の現状
と課題～」

三重県中学校体育連盟 研究部長
亀山市立亀山中学校 城口 直紀

○提案趣旨

三重県教育委員会では、令和2年10月に有識者や関係団体の代表者による「部活動のあり方検討委員会」を設置し、持続可能な部活動のあり方を検討している。令和2年度の議論のまとめとして、本県の持続可能な部活動の方向性を「部活動指導員等の外部人材の一層の活用」、「休日の部活動の段階的な地域移行」などとした。この中の「休日の部活動の段階的な地域移行」については、令和3年度からモデル校で実践研究を行っている。導入が始まった3市町4中学校の地域移行の現状を調査し、今後の学校と地域の連携について効果的な取組を考察したい。

②「葛巻町における“地域部活動”の在り方について」

岩手県中学校体育連盟 岩手地区中学校体育連盟評議員
葛巻町立葛巻中学校 校長 菊地 正道

○提案趣旨

全国が目指す、休日の部活動を段階的に学校教育から切り離し、地域のスポーツ活動「地域

部「活動」へ移行することについて、本町が令和3年度に県からの指定を受けて、部活動の現状を踏まえながら行った実践からその課題を明らかにし、さらに今後の「地域部活動」の在り方について検討した結果を発表する。習や試合を多めにして今後のそれぞれの地域・学校の取組の参考となれば幸いである。

③ 紙上発表

「運動部活動における学校と地域社会との連携～津久見市拠点校方式の合同部活動について～」

大分県中学校体育連盟 研究部長
大分市立上野ヶ丘中学校 濱崎 憲司

○提案趣旨

大分県津久見市では令和元年度に大分県中学校体育連盟に拠点校部活動の提起をし、拠点校型の部活動の推進に取り組んできた。拠点校方式という地域を含めた学校間の連携について紹介し、今後の運動部活動と地域との連携の在り方について模索していきたいと考えている。

○質疑・協議内容

【宮崎県 西田 英司】

地域移行の実施主体運営団体、人件費等を教えていただきたい。

2点目は、地域で指導される方の謝金の設定について教えていただきたい。

【三重県 パネリスト】

元教員が陸上教室をされていて、その延長線で移行していったという例がある。

また、町が早くから取り組みを始めており、来年度4月からこの中学校ではすべての部活動が総合型地域スポーツクラブとして活動する予定であると聞いている。

【岩手県 パネリスト】

葛巻町では、実施主体は教育委員会で、謝金

は 1600 円×時間×日数である。

【大分県 濱崎 憲司】

津久見市では、実施主体は教育委員会で、謝金は部活動指導員に合わせて設定している。

【福島県 南 大紀】

部活動指導をお願いするにあたり、生徒指導上の問題や課題を抱えている生徒、特別な配慮を要する生徒の情報共有をどのように行っているかお聞かせください。

【三重県 パネリスト】

電話連絡や直接会ってお話をする。

また、顧問が直接活動を見に行き、情報共有を行っている。

葛巻町では、実際に参加している生徒がいじめられると訴えて、トラブルに発展したケースがあった。そのようなトラブルは、今後も起こり得る課題であると思う。

津久見市では、拠点校方式であるため、生徒の情報共有・交換ができるよう環境を整えている。

【香川県 富田 武志】

本県でも、スポーツ庁から指定を受けたモデル校の実施の中で、新人戦のタイミングでの地域移行を進めていた。しかし、土日のみ外部指導者にお任せすることで指導が入らず、結局教員が土日もついて見守りをするということが起こっており、完全な地域移行に至らなかった。三重県の情報交換はどのように進めているのか、お伺いしたい。

【三重県 パネリスト】

正直、スムーズな情報交換ができていないことが多くあり、トラブルや課題を抱えている。教員が土日に無償で様子を見に行かなければならない状況もあり、学校に保護者が相談してくる実態もある。もちろんトラブルがあればすぐに連絡を取り合っているが、実際顧問が見に行

くケースも多く、全てが地域の方にお任せできている状況ではない。

【岩手県 小林 智】

アンケート調査で、教員がこの事業に満足しているかが 100%になっていることに驚いた。専門外の先生が多いのか、指導者の確保の見通しはどのようになっているか、他に課題はないのか。

【三重県 パネリスト】

専門外の教員もいる。全てではなく、どちらかと言えば満足という回答も含むため、100%満足していることではない。このデータも最新のものではないため、今現在進行している中で、新たな課題が出てくる可能性もある。

【三重県 辻村 鉄也】

地域移行に関して、指導者の確保が非常に難しい。本校の部活動指導員は、昨年が 1 名、今年が 2 名と枠が増えているものの、指導者確保の問題はある。

【三重県 山下 隆久】

地域移行に関して、人材確保、場所、経費の問題など様々な課題を整理している状態である。

【香川県 小前 宏彰】

三重県の発表のアンケート調査で、生徒、保護者と教員の中での認知のギャップ、地域移行に関する周知が必要であると言う課題が挙げられているが、これから県大会を迎えるにあたり、地域クラブへの周知の仕方について、どのようにお考えか。

【三重県 パネリスト】

県で 3 回、大会参加の条件や規約等に関する説明会を予定している。

【指導助言Ⅰ 西川 幸宏】

地域移行という問題に対して、部活動がなぜ学校から切り離されなければいけないのか。部活動だけをなぜ悪者にするのか。これが、私の地域移行に対する考えである。学習指導要領に「部活動は学校教育の一環である」という言葉がある限り、部活動は全ての子どもたちのためにある。地域移行という発想自体が見切り発車であり、多くの課題が残る。保護者の負担、受け皿の問題、更には、いきすぎる指導の問題が必ず出てくる。部活動ガイドラインは、子どもたちの健全育成のためにある。そのガイドラインが守られているか、地域に移行すれば、学校から口出しすることはできない。しかし、何かトラブルがあれば、学校側は関わらずにはいられない。そういった問題も出てくる可能性がある。私自身、一番危惧していることは、先生方のやる気がなくなっていくことである。子どもたちのやる気の低下以上に、先生方の意欲が低下していくのではないか。大人の役割は、子どもたちの安全管理を行うこと。この応援団を増やしていくことが一番大事なことだと思う。地域の状況を踏まえたモデルを中心に、子どもの意見、保護者の意見、地域の意見を十分に聞きながら、人材の確保と、各々が連携をとることによって、地域移行は推し進めなければいけないと思う。

【指導助言Ⅱ 田中 節】

12月16日NHKの報道後、文部科学大臣より2023年度から地域移行が始まると明言された。勢いは多少緩やかになったが、今後も進んでいくだろうと思われる。12月には、学校部活動及び新たな地域クラブ活動のあり方に関する総合的なガイドラインが、文化庁及びスポーツ庁で出された。不安は募るが、本日の研究発表は参考になり、地域移行のモデルになるものであった。三重県では、「部活動のあり方検討委員会」を立ち上げ、持続可能な部活動のあり方を検討していただいた。外部人材の一層の活用、休日の部活動の段階的な地域移行の方向性を示すことで、効果的な

指導と教員の負担軽減につなげていただきたい。岩手県からは、葛巻町における地域部活動のあり方について報告していただいた。国から地域運動部活動推進、実践研究事業の指定を受けて、活動の成果と課題を明らかにし、その克服に取り組んでいただいている。部活動の数を減らすことなく、少ない人数で、日々の活動を充実させることが、保護者の願いである。紙上発表の大分県からは、拠点校方式という地域を含めた連携、学校間の連携が紹介された。今後の部活動と地域の連携のあり方について、救済措置で対応しきれないものがあり、各取組についての課題も検討されていた。地域移行で一番考えなければならないのが受け皿だ。子どもたちの指導・管理を誰が担うのか。今までの日本のスポーツ界を担ってきた教員の役割、一面がなくなってしまうことが心配である。部活動は日本の文化であり、守っていかなくてはならないものだ。中体連の長い歴史の中で本連盟の担ってきた役割の重要性について理解し、学校・地域どちらが主軸になっても、子どもたちの活躍の場を提供するという大きな目標を忘れてはならない。これから、各地域での取組が必要になってくる。この分科会のテーマでもある「連携」をキーワードに、いろいろな方法を模索してほしい。久しぶりの研究大会で、九州で1つという言葉聞いて嬉しく思っている。



〈第3分科会〉

第4分科会

分科会テーマ

「当面する運動部活動の諸課題」

研究発表

- ◆ 福本 亘哉 北海道中学校体育連盟 調査研究委員
根室市立光洋中学校

「生徒数減少に伴う部活動の諸課題」 ～北海道根室地区における課題～

- ◆ 夏木 誠 広島県中学校体育連盟 研究部長
広島市立亀山中学校

「指導者の資質向上の取組について」

紙上発表

- ◆ 佐藤 俊介 長崎県中学校体育連盟 副理事長
長崎市立大浦中学校

「長崎県の運動部活動の諸問題」 ～今、直面している課題と対策～

第4分科会

第4分科会 テーマ

「当面する運動部活動の諸問題」

【指導助言者】

(公財)日本中学校体育連盟 副会長 小野坂 寧晃
長崎県中学校体育連盟 研究部 会長 田川 信一郎

【司会者】

長崎県中学校体育連盟 会長 竹市 保男

【運営責任者】

福岡大会実行委員 副会長 藤丸 豊

【提案内容】

①「生徒数減少に伴う部活動の諸問題

～北海道根室地区における課題～

北海道中学校体育連盟 調査研究委員
根室市立光洋中学校 福本 亘哉

○提案趣旨

全国的に生徒数が減少している現状がある。北海道もその例外ではなく、生徒数、更には部活動参加生徒数の減少に歯止めがかかっていない。広大な土地を抱える北海道では、過疎地域も多く、複数校合同チームを組む学校が増加の一途をたどっている。そのような中で根室地区中体連が抱える課題や今後の望ましい運動部活動の在り方について考える機会としたい。

②「指導者の資質向上の取組について」

広島県中学校体育連盟 研究部長
広島市立亀山中学校 夏木 誠

○提案趣旨

広島県中学校体育連盟では、運動部活動における指導者の資質向上を目指すことを目的として「生涯体育・スポーツを指向した運動部活動をめざして」というテーマを主題に研究を進めてきた。主な取組として、広島県中学校運動部活動指導者研究大会を開催し、運動に関しての専門的な方や著名な方の講演を依頼したり、中学校部活動の実践発表をおこなったりしてきた。この報告では、その研究大会の一部を紹介し、指導

者の資質向上の参考に供したい。

③ 紙上発表

「長崎県の運動部活動の諸問題

～今、直面している課題と対策～」

長崎県中学校体育連盟 副理事長
長崎市立大浦中学校 佐藤 俊介

○提案趣旨

少子化から派生する様々な課題が山積する中、特に、県内において長年、常に検討されている複数校合同チームの編成について注目し、これまでの変遷とこれからの在り方についてまとめることで、子どもたちのためになる運動部活動の在り方について考えたい。また、「運動部活動の在り方に関するガイドライン」を踏まえ、今できる取組や工夫などを挙げ、継続性のある運動部活動についても県中体連と各郡市町中体連の共通認識を深めたいと考え、このテーマを設定した。

○質疑・協議内容

【宮城県 櫻井 直樹】

北海道の部活動生徒加入率がこの4年間で20ポイント近く下がっている要因を教えてください。

【北海道 パネリスト】

部活動加入率の減少に関する明確な要因ははっきりしていないが、コロナ禍での活動制限によって生徒たちが部活動から離れていったことが考えられる。

【青森県 石岡 聖逸】

他県において全員部活動参加制から自主参加制にすることによる生徒変容や事例等あれば聞きたい。

【長崎県 濱崎 大輔】

長崎県は、全員部活動制をとっているところも多くあるが、少子化や昨今の状況を見て時代にそぐわないと、見直しをする動きがある。変容

については、今後見えてくると考える。長崎県では、指導者不足が悩ましい問題である。指導者確保のための取り組みがあれば教えていただきたい。

【広島 パネリスト】

人材確保のための直接的な取り組みはしていないが、広島市では部活動指導員が確保できている状況にある。

【北海道 パネリスト】

人材確保について中体連で取り組んでいる事はないが、各学校のつながりの中で人材を確保している部分が多い。

【滋賀県 川原 岳】

中体連という枠組みの中で、指導者研究大会の講師を選定するポイントや配慮すべき事項、このような大会を開く上で必要なことがあれば教えていただきたい。

【広島県 パネリスト】

懸念すべき事項は、実践発表者の確保である。広島市は、毎年担当地区を決めて、2名ずつの実践発表者を出すようにしている。また、講師の選定や開催地区も輪番で回しているため、その地区に縁のある方を優先的に検討している。

【指導助言 I 田川 信一郎】

北海道からの発表で、複数校合同チームの編成などを最大限活用し、生徒が大会に参加出来るように工夫している点が素晴らしい。しかし、隣の学校までの送迎などの問題が原因で部活動に入部しない生徒が年々増えていることは、深刻な問題である。長崎県においても、群部や離島を多数抱えている中での総体運営には、常々頭を抱えている。同じ課題を抱えている地区の様々な取組を共有して、生徒に不利益がかからないように工夫・改善が必要であると感じた。次に、広島県の発表について、講師を招いての講演会や現場の実践発表会の開催に関しては、人材確保が大変難しかったと推測で

きる。特に県中体連事務局が輪番制になった平成29年度は相当な苦労があったのではないかと。そういった危機を乗り越えてこられた結束力に、ただただ敬服するばかりだ。課題にあがった講師及び実践発表者の確保、限られた予算での開催、地域移行に伴う大会のあり方等、課題は残る。教員の働き方改革や部活動地域移行の観点から言えば、主催者や主催団体を変えての開催も考えられる。様々な苦難を乗り越えながら推進されている各地区中体連の発表内容を読みながら、同じ悩みを共有できたことや、参考にしたい取組が得られたことを嬉しく思う。一番の大きな課題である部活動の地域移行については、各都道府県でどう受け入れ、中体連の立場がどうなっていくのかを、行政や競技団体と連携を深めながら、生徒が不利にならないように整理していく必要がある。

【指導助言 II 小野坂 寧晃】

北海道の軟式野球部の事例では、制度や規定があるために大会に参加できないこと、学校間の距離の問題で、入部を諦めざるを得ないという事例が紹介されていた。今後、北海道だけでなく、日本全国で少子化に伴う部活動の存続が危ぶまれるだろう。部活動の地域移行について多くの課題を抱える中、限られた人数で子どもたちに満足いく活動の場を提供するために、学校対抗、1人1種目、教員による引率体制等の見直しがされている。広島県の発表は、これまでの歴史から、続けることの大切さや、若い世代につなぐことの意義等、これまで研究大会に関わった先生方に深く敬意を表す。また、講習会の内容が子どもたちに還元され、効率的な部活動実践につながっていると確信している。今後持続可能な部活動を目指す中で、指導者の問題、受け皿の問題、活動場所の問題、保護者の経済的な負担など、新たな課題が次々に出てくるだろう。指導者の資質向上と合わせて、部活動は生徒にとっても、先生にとってもやりがいのある活動、そして携わる顧問は、子どもたちと一緒に成長できる教師であってほしい。長崎県の紙上発表に関して、先日香川県でスポーツ協会と教育委員会が共

催しての運動部活動の地域移行に関するフォーラムがあった。その中で、ここ 20 年、香川県内の部活動部員数は年々減少傾向にあるのにも関わらず、学校における部活動の数は横ばいであるというグラフが示された。これは全国でも同じで、学校内の部活動の数は変わらず、生徒数が減っていること。多くの部活動数を抱えるが故に、全員の先生が何らかの部活に関わらなければならず、これが先生方の疲弊につながっている。その一方で、県教育委員会は、部員数が減少してもなお部活動を存続し、子どもたちにスポーツの機会が与えられるよう努力してきたと話していた。少子化の中での部活動の廃止という問題は非常に難しい。運動部活動を将来継続するためにできる取組や工夫では、様々な規定の整備や保護者・地域の理解、指導者の確保等が挙げられている。中でも、運動部活動の意義や役割等の意見のまとめでは、各項目から部活動の教育的な意義や役割が多く出され、部活動の存在意義を再確認できる。その一方で、働き方改革にも触れ、新しい時代に合った運動部活動を模索していく必要性を説いており、感心させられた。部活動の地域移行に関しては、スポーツ庁からの要請を受けて、急遽決まって実施しているというのが現状である。ただ粛々と前に進まなければならないという思いをもちつつ、子どもたちを中心に据えた部活動のあり方を模索する必要がある。生涯にわたってスポーツに親しむ習慣や環境、組織やシステムを学校だけではなく行政や地域が一体となって構築することが大切であると考えている。





〈第 4 分科会〉

大会スナップ集

【開会行事】



【特別講演】






木の上立って見ましょう


～アスリートの自立を引き出すコーチング～

第39回(公財)日本中学校体育連盟研究大会

2023年1月19日
東京ガスケミカル 阿久根謙司



「木」の上に「立って」「見ましょう」=「親」



枝・葉 = coaching = want to

幹 = teaching = must (have to)

根 = coaching = 信頼関係

自立

放任

過保護

【シンポジウム】



【分科会】
- 第1分科会 -

「中体連組織の現状と課題」

～時代に応じた持続可能な中体連～

大阪中学校体育連盟



第1分科会

分科会テーマ

「中体連の組織及び競技会の在り方と その運営」

徳島県中学校体育連盟

徳島市徳島中学校 教諭 賀好 行彦

令和4年度 公益財団法人 第39回日本中学校体育連盟研究大会 福岡大会



**リフレッシュ期間
がもたらす効果に
ついて**
～自ら対話的・主体的に取り組む自立
した部活動部員の育成を目指して～



長野県中学校体育連盟 研究部

令和4年度第39回大会（公財）日本中学校体育連盟研究大会

第2分科会『豊かな心と健やかな体を育む運動部活動』

意欲を喚起させるための剣道指導の工夫

～競技力向上や健康体力の保持増進を目指して～

千葉県小中学校体育連盟 事務局次長
千葉市立稲毛中学校 岩井 洵

運動部活動における学校と地域との連携

～三重県における部活動の地域移行の現状と課題～

三重県中学校体育連盟
研究部長 城口 直紀

葛巻町における「地域部活動」 の在り方について



小屋瀬中学校



葛巻中学校



江刈中学校

葛巻町立葛巻中学校
校長 菊地正道

生徒数減少に伴う部活動の諸課題 ～北海道根室地区における課題～

北海道中学校体育連盟 調査研究委員
根室市立光洋中学校 福本 亘哉

令和4年度 第39回公益財団法人
日本中学校体育連盟 研究大会

指導者の資質向上の取組について

広島県中学校体育連盟
研究部長 夏木 誠

【閉会行事】



〈次期開催地あいさつ 京都府中学校体育連盟会長 野川 晋司〉



〈閉会のことば 福岡県中学校体育連盟会長 野口 修司 〉

**令和4年度 第39回（公財）日本中学校体育連盟研究大会
福岡大会参加数一覧表**

中体連名	参加人数	分科会				中体連名	参加人数	分科会			
		1	2	3	4			1	2	3	4
北海道	6	0	0	1	5	京都	6	2	1	2	1
青森	5	2	0	0	3	大阪	10	5	2	2	1
岩手	8	0	0	8	0	兵庫	7	2	1	1	2
宮城	4	1	1	1	1	奈良	2	2	0	0	0
秋田	5	1	2	1	1	和歌山	3	1	0	1	1
山形	4	2	0	1	1	鳥取	2	0	2	0	0
福島	5	2	1	1	1	島根	7	1	1	2	2
茨城	5	3	0	2	0	岡山	9	3	0	2	4
栃木	3	1	0	1	1	広島	8	2	1	2	3
群馬	3	3	0	0	0	山口	6	0	0	6	0
埼玉	6	3	1	1	1	徳島	5	4	0	0	1
千葉	6	0	6	0	0	香川	5	0	0	0	5
東京	3	1	0	1	1	高知	6	3	0	3	0
神奈川	5	2	1	1	1	愛媛	2	2	0	0	0
山梨	2	0	2	0	0	佐賀	5	1	1	2	1
長野	6	1	3	1	1	熊本	3	0	0	3	0
新潟	3	1	1	0	1	長崎	8	1	1	2	4
富山	2	0	0	2	0	大分	4	0	0	4	0
石川	4	1	1	1	1	宮崎	8	0	6	2	0
福井	4	0	0	2	2	鹿児島	5	5	0	0	0
静岡	10	0	0	10	0	沖縄	8	3	1	3	1
岐阜	2	0	0	2	0	日本	4	1	1	1	1
愛知	3	1	1	1	0	実行委	55	15	14	13	13
三重	8	1	1	5	1						
滋賀	5	1	1	0	3	総計	295	80	54	94	65

編 集 後 記

令和4年度第39回(公財)日本中学校体育連盟研究大会福岡大会が、福岡県福岡市において、コロナ禍の中、3年ぶりの集合・対面にて開催され、無事に終えることができました。福岡県中学校体育連盟を中心とする実行委員会として、関係各位のご協力とご尽力の賜物と深く感謝申し上げます。

本大会の研究主題「豊かなスポーツライフの実現に向けて～持続可能な運動部活動の在り方とその運営～」のもと、1日目に阿久根謙司氏の講演及び福岡県ゆかりのスポーツ指導者や関西大学教授をお招きしてのシンポジウムを行い、2日目に分科会を行いました。全国の都道府県中体連の指導・運営に当たる関係者が一堂に会し、豊富な実践事例や成果の報告及び諸問題を持ち寄り、解決に向けた討議・情報交換など、実りある研究協議ができ、貴重な研究大会になったと考えます。

最後に、報告書の作成にあたりご協力いただきました関係各位に深く御礼を申し上げるとともに、令和5年度の京都大会がさらに意義深い大会になりますよう祈念いたしまして、編集後記といたします。

令和5年3月

福岡大会実行委員会一同

令和4年度
第39回(公財)日本中学校体育連盟研究大会
福岡大会報告書

発行年月日 令和5年3月1日

発行責任者 (公財)日本中学校体育連盟会長 平井 邦明
事務局 〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘4番2号
Japan Sport Olympic Square 401号室
TEL 03-5843-1961

編 集 者 第39回(公財)日本中学校体育連盟研究大会
福岡大会実行委員会